# 環境で地方を元気にする
# 地域循環共生圏づくりプラットフォーム事業

## 成果報告会　発表資料

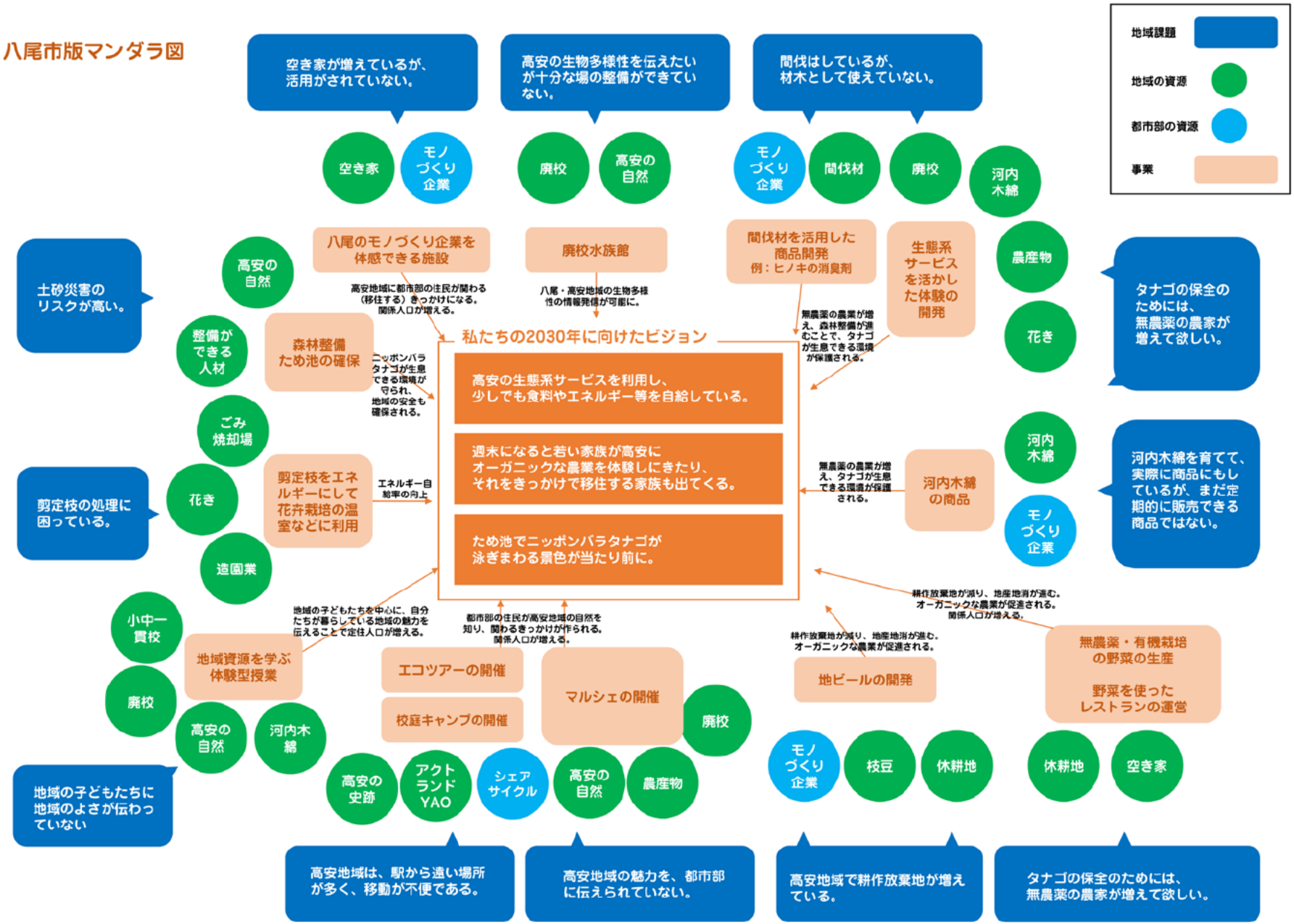
活動団体名：環境アニメイティッドやお

活動地域　：大阪府八尾市高安地域

活動におけるテーマ・キャッチコピー

**キンタイを軸とした農山村部と都市部の**
**循環型共生圏づくり**

# 地域循環共生圏を活用して目指す地域の姿



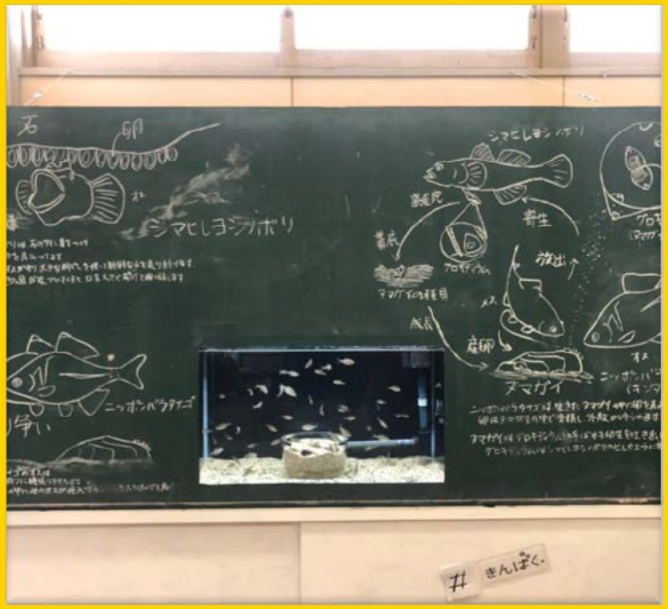
# 地域のビジョンを実現するための成果指標

●高安の生態系サービスを利用し、少しでも食料やエネルギー等を自給している。
●週末になると若い家族が高安にオーガニックな農業を体験しにきたり、それをきっかけで移住する家族も出てくる。
●ため池でニッポンバラタナゴが泳ぎまわる景色が当たり前に。

| | 短期目標 | 長期目標 |
|---|---|---|
| 環境 | ニッポンバラタナゴの保護池の数が<br>6か所から10か所に | ニッポンバラタナゴの生息数が<br>2万匹から20万匹に |
| | 河内木綿の生産数（反数）が<br>1反から2反に | 河内木綿の生産数（種付きの綿量）が<br>50kgから1000kgに |
| 経済 | 地域ブランド品の開発件数が<br>2件から7件に | 地域ブランド品の販売額(売上)が<br>15万円から1000万円に |
| | エコツアーの実施回数が<br>1回から3回に | エコツアーの参加者数が<br>30人から1000人に |
| 社会 | メディア掲載件数(自然環境)が<br>5件から10件に | 八尾市の自然環境に対する理解度が<br>13%から20%に |
| | きんたい廃校博物館の開館日が<br>4日から12日に | 廃校への来場者数が<br>1万人から5万人に |

# コアとなる事業の概要3つ（事業のタネ）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 事業の名称 | **廃校の利活用** | |
| | 事業の概要 | ・きんたい廃校博物館の運営<br>きんたい廃校博物館では、きんたいをはじめとする高安地域の動植物を都市部の方に発信する。主たる担い手は、NPO法人ニッポンバラタナゴ高安研究会。本事業により、高安地域への関係人口を増やす<br>・高安の森林資源を利用した木育教室や河内木綿を使ったもめんカフェとの連携も図る。<br>・企業と連携した商品開発にも注力する。 | 想定される課題・ボトルネック<br>廃校のハード面の整備が不十分。生き物展示の部屋に空調設備が取り付けられていない。<br>ソフト面では、運営体制が明確になっていないため、次年度は地域も巻き込んで運営体制を再検討したい。地域資源を活用した商品開発を企業と行うため、企業への声掛けを引き続き実施する必要がある。 |
| 2 | 事業の名称 | **マルシェ** | |
| | 事業の概要 | 高安地域の地域資源を実感できるマルシェイベント。<br>次年度以降は、既存のマルシェだけでなく、廃校の校舎周辺をさらに有効活用し、八尾・高安地域の地域資源を発信することを目的とした、小規模なマルシェも複数回開催する予定。<br>マルシェでは地域の農作物の販売、森林資源を活用した体験の提供や商品の販売を行う。 | 想定される課題・ボトルネック<br>・継続開催するための体制を構築。<br>・継続開催するため収益の確保。 |
| 3 | 事業の名称 | **廃校エコツアー** | |
| | 事業の概要 | 高安地域には、自然資源が豊富にあり、歴史遺産もたくさんある。2019年度には、試験的に自転車エコツアーを実施。ツアーの見どころになる箇所が広範囲にあり、徒歩で巡るには難しい距離だったため、自転車で回る計画とした。参加者からは内容や費用面での感想をお聞きし、次回以降の計画に反映させられるようにした。主たる事業の担い手はNPO法人ナック。 | 想定される課題・ボトルネック<br>・ターゲットに訴求する方法を検討する必要がある。<br>・地域に、レンタサイクルの拠点があれば、自転車でのエコツアーが日常的に実施できるようになる。 |




# きんたい廃校博物館

# 今年度事業の成果と課題、今後の意気込み

## 今年度の成果（本事業に取り組んで良かったこと）

- 本事業に取り組むことで、特にコアになるステークホルダーとの連携が強化された。結果として、方向性が廃校を中心とした取り組みに定まり、博物館を開くことができた。
- 地域との意見交換会を開催したことにより、地域住民の意見も広く聞くことができた。その結果、今後さらに地域との連携を図ることができそうになっている。
- 地域資源を活用した商品の開発について、企業との連携で実際に商品を制作するところまで実現した。

## 地域の活動の上での課題

- 将来ビジョンに対して、実施したいことが多くひとつのマンダラにまとめることが大変だった。
- ステークホルダー（利害関係者）という表現が企業や金融機関にとって、リストへの記載を阻む原因となった。また、作成されたステークホルダーリストについて、どのように公開されるのかが不明確なため、企業への説明が難しいところがあった。
- 事業計画の資金面についての検討が不十分だった。次年度への課題として取り組みたい。

## 今後の意気込み

- 廃校の利活用については、ハード面とソフト面の両側をさらに整備して、継続した自立運営ができる施設にしていきたい。
- 既存のマルシェに加えて、地域資源の発信の意味を強めた形で、小さなマルシェを複数回実施したい。
- エコツアーについては、試行的に1回実施したので、その検証結果をもとに次年度も引き続き企画を検討、実施したい。次年度については、廃校を活用したキャンプの実施も検討する。
- 商品開発、体験の開発については、今年度は、ふくさ製造の企業と河内木綿がつながることで新たな商品開発につながった。次年度は、更なる商品開発や体験の開発を行っていきたい。
- 地域の造園業から排出される剪定くずの処理について課題がある。その課題を解決するための地域エネルギーセンターを引き続き検討する。